

平成明朝体のデザイン変異に関する共時的認知分析

横山詔一*・高田智和*・當山日出夫**・米田純子*

*国立国語研究所, **立命館大学GCOE

キーワード：平成明朝，デザイン変異体，共時的分析，認知，選好

日本規格協会・国立国語研究所・情報処理学会の3者連合体が経済産業省の委託を受けて制作した平成明朝体グリフ約6万字種のうち、字形デザインにおける変異が顕著で、かつデザイナーから学術的な検討を要請されることが多いデザイン差をいくつか取り上げ、認知科学と社会言語学的手法を援用しながら分析をおこなった。社会言語学的な調査データは、東京の下町と山の手、京都のほか、海外の台湾においても収集された。その結果、非伝統的な新しいデザインが好まれる傾向にあることが明らかになった。

Cross-sectional analysis of preference task for design variant of *Heisei-Mincho*

YOKOYAMA Shoichi*, TAKADA Tomokazu*, TOUYAMA Hideo**, & YONEDA Junko*

*National Institute for Japanese Language, **Ritsumeikan University

Key words: Heisei-Mincho, Design variant, Cross-sectional analysis, Cognition, Preference

This paper proposes new methods of cross-sectional analysis in a preference task for design variant of *kanji*. The result showed that Japanese people prefers for revised design than traditional one in *Heisei-Mincho*.

1. はじめに

字形デザインの違いは、日々の言語生活にどのような影響を及ぼしているのだろうか。本研究は、字形デザインの変異が顕著で、かつ情報機器産業や印刷産業などの文字デザイナーからも学術的な検討を要請されることが多い平成明朝体のデザイン差をいくつか取り上げ、文字論の知見に立って認知科学（横山・笹原・當山，2006）と社会言語学的手法を援用しながら分析をおこなった。データ収集は東京の下町と山の手、京都のほか、海外の台湾においても実施した。以下、グリフは個々の文字の字形を表現したものを、フォントはある文字コードの全部の文字グリフを集めたものを指す。

2. 方法

2. 1. 刺激材料

刺激材料は以下の12字体であった。

301 八, 302 家, 303 像, 304 外, 305 非,
306 北, 307 均, 314 班, 315 食, 316 音,
317 杖, 318 斧 (数字はペアの識別番号)

各字体のデザイン変異グリフを図1に示す。これらは、日本規格協会が国立国語研究所および情報処理学会と共同でデザインした約6万字の平成明朝体グリフから選んだ。



図1 デザイン変異グリフ12ペア

2. 2. 手続き

2. 2. 1. 東京や京都での選好調査

(目的) 日本語母語話者が、デザイン変異グ

リフのペアのどちらを好むか調査した。

(教示) 調査の冒頭で「ワープロを打っている場面だけをイメージするように」と伝え、異体字のペアを実験参加者に呈示して、より使いたいと感じる方の字を選択させた。具体的な教示は次の通り。「この調査は、漢字の使われ方を調べるものです。これから、字の形は違いますが、読みと意味がまったく同じ漢字のペアをお見せします。たとえば「断」と「斷」は、同じ読みで同じ意味の漢字のペアです。もし、あなたがワープロを打っているとしたら、どちらの字を使いたい、教えてください。2つの漢字をよく見て、使いたいと感じる程度を比較し、より使いたいと思う方の字に○印をつけてください。両方とも使いたい、あるいは両方とも使いたくないと感じるペアがあるかも知れませんが、とにかく、どちらか一方の字だけに○印をつけてください。判断は、あまり深刻に悩まずに、直観的に行ってください。(以下略)」

2. 2. 2. 幻の知覚実験

(目的) 瞬間呈示した語の読み取り成績にどのような要因が影響するのを探る研究が1950年代に米国でいくつか行われた。その報告によると、使用頻度の高い語ほど読み取り成績が良い。また、呈示された語はどれかを2つの選択肢から選ぶように教示したうえで、実際には語を呈示しないで2肢強制選択を行わせると、選択肢のうちの使用頻度が高い方を選ぶ率が高くなるという。これをデザイン変異グリフで追試した(横山, 2007)。

(教示) 実験の冒頭で「これから漢字の瞬間的な読み取りに関する調査を行います。12個の漢字がスクリーンに1つずつ出ます。1文字当たりの呈示時間は100分の1秒です。文字と文字の間に「*」が10分の1秒ぐらい出ますので、それは見えることがあると思います。つまり、皆さんの目には「*」がチカチカと点滅しているように見えるだけかと思いますが、スクリーンに注意を集中して、よく見てください。意識的には見えていないと感じても、まばたき

をなるべくしないよう、よく見てください。」

漢字が呈示されるという教示は偽装であり、実際には“* → 空白画面 → * → 空白画面”というサイクルでスクリーンに刺激を映した。刺激呈示が終わると、301 八、302 家、303 像、306 北のデザイン変異グリフ4ペアについてどちらが見えたと思うかの当て推量判断を求めた。これを2回繰り返した。

2. 2. 3. 首都圏ネット調査

(目的) 日本語母語話者が、デザイン変異グリフのペアのどちらを好むかについてインターネットを介して調査した。

(教示) 「この調査は、漢字の使われ方を調べるものです。これから、字の形は違いますが、読みと意味がまったく同じ漢字のペアをお見せします。たとえば、「亜一亜」は、同じ読みで同じ意味の漢字のペアです。もし、あなたがワープロを打っているとしたら、どちらの字を使いたい、教えてください。二つの漢字をよく見て、使いたいと感じる程度を比較し、より使いたいと思う方の字を選んでください。両方とも使いたい、あるいは両方とも使いたくないと感じるペアがあるかも知れませんが、とにかく、どちらか一方の字だけを選択してください。判断は、あまり深刻に悩まずに、直観的に行ってください。」そして、301 八、306 北、317 杖のデザイン変異グリフ3ペアをWebで呈示し、選好判断を求めた。

2. 2. 4. 海外での選好調査

(目的) 台湾日本語学習者にデザイン異体グリフのペアを示し、日本人に手紙を書く場面で、より使いたいと感じる方のデザインはどちらかを探った。

(教示) 教示は次のようなものであった。「この調査は、漢字の使われ方を調べるものです。これから、字の形は違いますが、読みと意味がまったく同じ漢字のペアをお見せします。たとえば日本語では、「断」と「斷」は同じ読みで同じ意味の漢字のペアです。もし、あなたがパソコンで日本語の文章を書いて日本人に送る

としたら、どちらの字を使いたい、教えてください。2つの漢字をよく見て、使いたいと感じる程度を比較し、より使いたいと思う方の字に○印をつけてください。両方とも使いたい、あるいは両方とも使いたくないと感じるペアがあるかも知れませんが、とにかく、どちらか一方の字だけに○印をつけてください。判断は、あまり深刻に悩まずに、直観的に行ってください。(以下略)

2. 3. 調査参加者

(1) 東京葛飾・山の手調査

地域差の要因として2群を準備した。すなわち、東京都葛飾区住民60名と、東京都山の手地区住民57名であった。葛飾群については、親の代から葛飾に住んでいて本人が葛飾生まれ葛飾育ちをターゲットとして、居住歴が10年以上もしくは5年以上の層も対象に含めた。山の手群は葛飾区に親戚や友人がおらず、その周辺にも訪れたことがほとんどない群を抽出した。年齢要因は4群(20代/30代/40代/50代)とした。葛飾群と山の手群で年齢条件がなるべくそろそろようように実験参加者を割り付けた。実験参加者は全員女性であった。実験は2005年12月19日(日)と同年12月21日(水)に実施した。

(2) 幻の知覚実験

上記の(1)と同じ。つまり、東京都葛飾区住民群60名、東京都山の手地区住民群57名で、全員女性。

(3) 首都圏ネット調査

地域差の要因として2群を準備した。一つの群は、東京都葛飾区もしくは江戸川区の住民で、かつ居住歴が10年以上の層。もう一つの群は、上記を除く東京都ならびに神奈川県エリアの住民で、上記の地域に親類・知人・友人がおらず、上記地域を訪れた経験がほとんどない層。年齢要因は4群(20代100名/30代100名/40代100名/50代89名)で、計389名。葛飾・江戸川群と、それ以外の群で、年齢条件をそろえた。実験参加者は全員女性であった。実験は

2006年3月15日(水)から同年3月20日(月)にインターネットを介して実施した。

(4) 立命館大学調査

京都市内にある立命館大学の学生150名(18歳から23歳)からデータを収集した。調査は2006年1月に立命館大学において実施。

(5) 台湾東呉大学調査

台北市内にある東呉大学日本語学科の3年生と4年生のほか日本語を副専攻とする学生計78名から日本語学習者のデータを収集した。年齢は20歳から24歳が大部分を占めていたが、25歳と28歳が1名ずつ含まれていた。調査は2007年5月に東呉大学において実施。

3. 結果と考察

デザイン変異ペアのどちらが伝統的な明朝体かの判定は、文化庁文化語部国語課(1999)の資料によった。以下に示すグリフ・ペアでは、一部の例外を除いて右が伝統的な明朝体になるように配置した。

なお、データのうち未記入・無回答は欠損値として扱い、除外した。よって字体ペアごとに標本数がやや異なることもある。

3. 1. 「八」のデザイン変異



いわゆる「はち屋根」の有無でデザイン差が生じているペア。左が、はち屋根なしのデザイン。常用漢字表掲出明朝体は屋根がある。教科書体は屋根なし。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統79.5%、伝統20.5%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数の方が有意に多かった($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験

ペア間で有意差はみられなかった。

(3) 首都圏ネット調査

選好率は、非伝統 70.2%、伝統 29.8%であった。この結果は先の(1)と似た数値を示している。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数の方が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 64.7%、伝統 35.3%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。先の(1)、

(3)にくらべて、やや非伝統の選好率が下がっている。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 67.9%、伝統 35.3%であった。先の(4)と非常に似た数値を示している。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いはみられなかった(カイ二乗の独立性の検定結果による：以下同様)。

3. 2. 「家」のデザイン変異

家 家

いわゆる「いのこ」にデザイン差があるペア。最終画の右払いの開始位置が異なる。常用漢字表掲出明朝体は右のデザイン、教科書体は左のデザインに近い。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 65.8%、伝統 34.2%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験

ペア間で有意差はみられなかった。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 71.3%、伝統 28.7%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 80.8%、伝統 19.2%であった。この結果は先の(4)と似た数値を示している。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いはみられなかった。

3. 3. 「像」のデザイン変異

像 像

「いのこ」にデザイン差があるペア。常用漢字表掲出明朝体は右のデザイン、教科書体は左のデザインに近い。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 76.1%、伝統 23.9%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験

非伝統を見たという回答が 60.3%に達し、伝統を見たという回答の 39.7%を大きく引き離れた。カイ二乗検定の結果、非伝統の人数が有意に多かった ($df=1, p<.05$)。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 80.7%、伝統 19.3%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 65.4%、伝統 34.6%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いがあった。カイ二乗検定の結果、伝統を選好する割合は台湾の方が日本よりも有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

3. 4. 「外」のデザイン変異

外 外

隣の「ト」の縦画と右払いとの交差の有無でデザイン差が生じているペア。常用漢字表掲出明朝体は交差があるデザイン。教科書体は交差なし。伝統的な明朝体にはゆれがある（交差するデザインである右が優勢）。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、左 87.2%、右 12.8%であった。カイ二乗検定の結果、左を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、左 90.7%、右 9.3%であった。カイ二乗検定の結果、左を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、左 87.2%、右 12.8%であった。カイ二乗検定の結果、左を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(6) 日本・台湾比較（立命館大と東呉大）

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いはみられなかった。

3. 5. 「非」のデザイン変異

非 非

4画目の「はね上げ」が縦画の左払いと交差するか否かでデザイン差が生じているペア。常用漢字表掲出明朝体は交差するデザイン。教科書体は交差しない。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 88.0%、伝統 12.0%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人

数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 87.3%、伝統 12.7%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 59.7%、伝統 40.3%であった。カイ二乗検定の結果、有意差はみられなかった。

(6) 日本・台湾比較（立命館大と東呉大）

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いがあった。カイ二乗検定の結果、伝統を選好する割合は台湾の方が日本よりも有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

3. 6. 「北」のデザイン変異

北 北

2画目の縦画と3画目の「はね上げ」との接触状況によってデザイン差が生じているペア。常用漢字表掲出明朝体は右のデザイン。教科書体は左。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 41.0%、伝統 59.0%であった。カイ二乗検定の結果、このペアについては伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.05$)。

(2) 幻の知覚実験

ペア間で有意差はみられなかった。

(3) 首都圏ネット調査

選好率は、非伝統 57.8%、伝統 42.2%であった。この結果は先の(1)とは異なる様相を呈している。そこで、年齢別に分析したところ、表1のようになった。カイ二乗検定の結果、デザイン変異グリフの選好パターンが年代によって有意に異なることが明らかになった (df

=4, $p < .05$ 。

表1 年代別のグリフ選好パターン

年代	非伝統 (%)	伝統 (%)
20代	50.0	50.0
30代	52.0	48.0
40代	65.0	35.0
50代	65.2	34.8

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 41.3%、伝統 58.7%であった。カイ二乗検定の結果、このペアについては伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .05$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 53.8%、伝統 46.2%であった。カイ二乗検定の結果、有意差はない。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いはみられなかった。

3. 7. 「均」のデザイン変異

均 均

旁の「つみ構え」の中の1画目が点か水平画かの違いによってデザイン差が生じるペア。常用漢字表掲出明朝体は水平画につくるデザイン。教科書体は点につくるデザイン。伝統的な明朝体は水平画につくる右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 83.8%、伝統 16.2%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 96.0%、伝統はわずか 4.0%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好

した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 30.8%、伝統は 60.2%であった。これは先の(1)や(4)とまったく逆のパターンを示している。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別に明白な違いがみられた。カイ二乗検定の結果、伝統を選好する割合は台湾の方が日本よりも有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

3. 8. 「班」のデザイン変異

班 班

中央の部分字体「リ」の1画目が縦画か点かの違いによってデザイン差が生じるペア。常用漢字表掲出明朝体は縦画につくるデザイン。教科書体は点につくるデザインに近い。伝統的な明朝体は点につくる右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 72.6%、伝統 27.4%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 78.7%、伝統 21.3%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 65.4%、伝統は 34.6%であった。これは先の(1)や(4)と似た数値を示している。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が有意に多かった ($df=1$, $p < .01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別

の違いがあった。カイ二乗検定の結果、伝統を
選好する割合は台湾の方が日本よりも有意に
多かった ($df=1, p<.01$)。

3. 9. 「食」のデザイン変異

食 食

部分字体「良」の1画目が縦画か横画かでデ
ザイン差が生じるペア。常用漢字表掲出明朝
体、教科書体ともに縦画。伝統的な明朝体は横
画の右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 91.5%、伝統 8.5%であっ
た。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人
数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 97.3%、伝統 2.7%であっ
た。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人
数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 56.4%、伝統 43.6%であっ
た。カイ二乗検定の結果、ペア間で有意差はな
かった。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別
に明白な違いがみられた。カイ二乗検定の結果、
伝統を選好する割合は台湾の方が日本よりも
有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

3. 10. 「音」のデザイン変異

音 音

部分字体「立」の1画目が縦画か横画かでデ
ザイン差が生じるペア。常用漢字表掲出明朝
体、教科書体ともに縦画。伝統的な明朝体には

ゆれがある (横画デザインである右が優勢)。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、左 98.3%、右 1.7%であった。カ
イ二乗検定の結果、左を選好した人数が有意に
多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、左 99.3%、右はわずか 0.7%であ
った。カイ二乗検定の結果、左を選好した人数
が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、左 53.8%、右 46.2%であった。カ
イ二乗検定の結果、ペア間で有意差はない。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別
に大きな違いがみられた。カイ二乗検定の結果、
右を選好する割合は台湾の方が日本よりも有
意に多かった ($df=1, p<.01$)。

3. 11. 「杖」のデザイン変異

杖 杖

いわゆる「筆押さえ」の有無によってデザ
イン差が生じるペア。表外漢字字体表掲出明朝
体は筆押さえなし。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 89.7%、伝統 10.3%であっ
た。カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人
数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査

選好率は、非伝統 89.5%、伝統 10.5%であっ
た。先の(1)と非常に似た数値を示している。
カイ二乗検定の結果、非伝統を選好した人数が
有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 81.3%、伝統 18.7%であっ

た。カイ二乗検定の結果、非伝統を愛好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 80.8%、伝統 19.2%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を愛好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いはみられなかった。

3. 1.2. 「斧」のデザイン変異

斧 斧

「筆押さえ」の有無によってデザイン差が生じるペア。表外漢字字体表掲出明朝体は筆押さえなし。伝統的な明朝体は右。

(1) 東京葛飾・山の手調査

選好率は、非伝統 88.9%、伝統 11.1%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を愛好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(2) 幻の知覚実験→実施せず。

(3) 首都圏ネット調査→実施せず。

(4) 立命館大学調査

選好率は、非伝統 80.7%、伝統 19.3%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を愛好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(5) 台湾東呉大学調査

選好率は、非伝統 73.1%、伝統 26.9%であった。カイ二乗検定の結果、非伝統を愛好した人数が有意に多かった ($df=1, p<.01$)。

(6) 日本・台湾比較 (立命館大と東呉大)

デザイン変異グリフの選好パターンで国別の違いはみられなかった。

4. まとめと今後の課題

以上の結果をまとめると次のようになる。

1. 明朝体グリフについて、日本では非伝統的な新しいデザインが好まれる傾向にある。

2. ただし、東京において「北」は若年層ほど伝統的なデザインを好む傾向がみられ、ほかの明朝体デザインの選好パターンとは一線を画する。同様の結果は立命館大学でも見られた。

3. 台湾の大学で学ぶ日本語学習者は、日本国内の日本人大学生よりも伝統的なデザインを好む傾向にある。

4. 日本人は、教科書体の影響を受けているのかもしれない。ただし「班」と「北」は別の説明が必要になりそうである。

日本では、言語生活研究の一環として、文字の景観調査がおこなわれている (Backhaus, 2005; 當山・笹原・高田, 2007; 高田・田島・米田, 2008)。今後はそれらの成果も視野に入れた研究手法の開拓や理論構築 (Yokoyama & Wada, 2006) が必要となるであろう。

5. 参考・引用文献 (アルファベット順)

- 文化庁文化庁国語課 (1999). 明朝体活字字形一覧—1820年～1946年—, 大蔵省印刷局
- Peter Backhaus (2005). Sings of multilingualism in Tokyo — A diachronic look at the linguistic landscape, *International Journal of the Sociology of Language*, 175/176, 103-121.
- 高田智和・田島孝治・米田純子 (2008). 文字生活研究における「景観文字調査」, 情報処理学会研究報告, 2008-CH-79, 1-8.
- 當山日出夫・笹原宏之・高田智和 (2007). 文字研究における GPS の利用, 情報処理学会研究報告, 2007-CH-73, 1-8.
- 横山昭一 (2006). 文字認知の単位, 月刊言語, 35 巻, 10 号, 36-43
- Yokoyama, S., & Wada, Y. (2006). A logistic regression model of variant preference in Japanese kanji: an integration of mere exposure effect and the generalized matching law. *Glottometrics*, 12, 63-74.
- 横山昭一・笹原宏之・當山日出夫 (2006). 文字コミュニケーションにおける異体字の選好と親近度: 再検査法による信頼性の検討, 社会言語科学, 9, 16-26.

【付記】台湾での調査実施にあたり、東呉大学の田中章夫教授と陳淑娟教授、台湾大学の林立萍副教授、ならびに埼玉学園大学の真田治子准教授から多大なるご協力とご支援を賜った。また、本研究は文科省科研費基盤研究(B)「WWWを用いた日本語コーパスの構築と文章理解支援への応用」(課題番号 19300280: 研究代表者・愛知教育大学准教授・野崎浩成) による補助を2008年度に受けた。上記の先生方に感謝申し上げる。